

水害の爪痕まぎまぎ

雨が止んだ直後に撮影した九田川水路の状況。山の斜面からの土砂が水路を塞いでしまい、上流側の溢れた水は西側（株式会社三共、岩多屋や民家等に流れ込んでしまった。

7月の豪雨ではたくさんの事業者や自治会員の方が被災をされました。心よりお見舞い申し上げます。

今回の水害については、長年の懸案だった浸水対策工事の完成の直後ということで、大変に残念な思いです。7月14日、市の担当課を招いて状況

について話し合いを持ちました。



その結果、様々なことが分かってきました。まず、今回の降水量です。平成21年の水害の際が総降水量266ミリメートルであったのに対して、285ミリメートルと記録で見れば最大降水量だったことが

分かりました。中でも7月1日の午前0時から時間雨量66ミリメートルという激しい雨が降ったことが分かりました。実際にあの時には、恐怖を感じるような雨降りでした。

また、1班の東側の山の斜面の激しい崩落です。この斜面からの土砂の崩落が水路を塞ぎ、水路ではないところに大量の水を流し込んでしまいました。また林幸雄さんの自宅の北側には水の流れのために斜面がえぐり取られ

夏の草刈りは一番ハード

真夏のあぜ道草刈り。一番きつい仕事です。八方原の環境を守る会の農地保全活動の大きな柱に「きめ細やかな雑草管理」があります。

農地と農地の間をあぜ道については



斜面の草を水路に落とさないように作業

「営農作業」として、多面的機能発揮交付金事業の対象にはなりません。あくまで水路の畦畔が主なも

てしまい、新たな滝つぼのような地形が出来上がってしまいました。

これらの状況については市の担当者は既に十分に掌握していましたが、「ここまで積み上げてきた対策だが、土木の仕事で対応できるのは限りがある。山の斜面はほとんどが個人の所有で、所有者が対策を打つことも難しいだろう。今後は農林業全体を見渡したような対策がないか、研究したい。」と話しました。

様々な方面から知恵を集める必要があるようです。



時間がたつと刈り払い機の重量が肩に食い込む

のになります。

5・7・9月と共同作業を行うことになっていますが、それぞれの個人の都合に合わせてその月の間であれば、自由に作業をしてくださいというルールにしています。

夏の真つ盛り、早朝や、強い日差しを避けながらの作業です。

地籍調査の杭まで押し流した

7月1日の豪雨の後、いろいろなものが上流側から流れてきました。庭先に珍しいものが流れ着いていました。



上に金属のプレートが取り付けられている樹脂製の杭です。これは地籍調査の折に使われた測量に使われたも

のに違いありません。山口市の地籍調査課に連絡してみると、すぐにその杭を引き取りにきました。杭を引き渡して、これがどこにあったのか教えてくれと頼みました。これだけ土砂が流れ出たのだから、どこかに崩落が起きたのではないかと考えたのです。後日地図上でおよその場所を教えてくださいました。場所は分かりましたが、目立った崩落場所は分かりませんでした。流れのそばが少しづつ浸食されたということでしょう。

長い腕のクレーンで慎重にゴミの撤去作業



狭い場所でクレーンを使って作業

榎野川本流に九田川が流れ出る排水口にはフラップゲートが取り付けられています。水位が上がっても支流側に流

れ込まないようになっています。

今回の豪雨の際には本流の上流からも大量の流木等が流れてきて、排水出口を塞いだように見えるほどでした。

堤防から作業できる場所は、直ぐに除去されましたが、流れの中に留まっているものは撤去できません。

7月28日、委託を受けた業者がクレーンを使って取り除いてくれました。小型ダンプ2台分はありました。

お盆の前に墓地の共用部分を除草清掃



夏の作業には防虫対策も重要

墓地の共用部分を除草清掃する共同作業が7月23日の朝、行われました。私たちの地区には墓地が3カ所あり

ます。いずれも山地と住宅地の境に面しているので山林の張り出しとの戦いです。

特に一番大きな「新墓地」は南側斜面の雑草と雑木の繁茂が激しく、毎年数人が草刈り機で奮闘することになっていました。ところが、今年はまだ刈られていました。

どうやら、隣接土地で事業を行っておられる「ナカイチ」さんが、刈ってくださいました。そばに雑草が山にしてありましたから、間違いありません。ありがとうございます。

摩擦で火を起こすことは簡単じゃない

おごり地域づくり協議会の「防災

デイキャンプ」が7月15日に、小郡地域交流センターの周辺で行われました。

いざという時に役立つ技術を身に着けようという15家族が参加して、身を守るための講義を受けた後、ロープワークを学びました。なかなかすぐにはできません。

その後、マッチなどを使わずに火を起こす体験をしました。懸命に専用の板と棒をこすり合わせましたが、着火に成功したのは3家族でした。



二人一組で火おこしに取り組みますが、容易ではありません。何度も何度も挑戦しました。